

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

一所懸命

「周藤の旦那さんが一人で、剣山に登っておられるぞ」

「せっかく完成した切り通しを一人で埋めてしまうつもりか」

人々の驚きの声の中で、彌兵衛は剣山に登り、再び、槌音を響かせ始めた。

巨大な岩山に彌兵衛一人で挑むことは、無謀なことだというのは、他の誰が批判しなくても彌兵衛自身がいちばん良くわかっていた。

それでもなお、やらなければならぬその気持ちで彌兵衛は鑿に込めて、槌を振った。

初めて岩に鑿を入れた時ほどの抵抗感は無かった。第二期工事の五年の間に彌兵衛は岩の心に、少しだけ近付いていた。

岩肌を摩りながら、岩の心を教えてくれた石工の言葉が、彌兵衛の心に浮かんだ。

せめて、自分たちだけでも手助けをしたいという五郎太と勘六の申し出を彌兵衛は、きっぱりと断った。

「おまえたちには、おまえたちの大切な仕事を与えられている。その仕事に精を出せ」

彌兵衛は身内の援助さえも受け入れなかった。

「庄屋の旦那さんは、とうとう、おかしくなっ

てしまわれた。かわいそうにのお」



画 高田勲

彌兵衛が剣山に入ってから、十日が過ぎ、二十日が過ぎた。けれども、一人の老人が打ち込む鑿の数など、たかが知れていた。

岩山は、なんの変化も見られないに等しい状況だった。

ただ、彌兵衛は雨の日も風の日もただ黙々と剣山へ出掛けた。クニも勘六も、それを黙って見送った。そっとしておくことが、今の彌兵衛にとって、いちばんの愛情だと思えたからだっ

た。

雨期が過ぎ、夏が過ぎ、山々が美しい紅葉を見せ始める頃になっても、剣山の工事現場にさほどの変化は見られなかった。

口さがない世間の噂に耐えかねて、五郎太は、何度、彌兵衛を連れ戻しに行こうと思ったことだろうか。その度に、クニは五郎太の手を取り、首を横に振った。

「旦那さまのやりたいことを、気の済むまでやらせてあげましょうよ」

「けど…」

五郎太は、その度にクニに逆らいたい気持ちになった。

「今、人々の噂に負けて、旦那さまを連れ戻して、旦那さまは、幸せでしょうか？ 私たちに出

来ることは、じっと我慢することです。今、私たちが負けてはなりません」

クニは毅然たる態度で、五郎太をたしなめた。

「いったい、どうしたら、旦那さまや御内儀さまのように強くなれるものでしょうか？」

五郎太は尋ねずにはいられなかった。

「ただ、一所懸命になることです」

クニは笑って答えた。